

『復讐者の悲劇』に於ける復讐

間瀬裕子

【キーワード：1『復讐者の悲劇』の作者，2 復讐悲劇，3 二重の基準，4 新旧（老若）の対立，5 ジェイムス朝演劇】

『復讐者の悲劇』(*The Revenger's Tragedy*) は作者不詳であり⁽¹⁾，推定創作年代 1607 年とされている劇作である。エリザベス 1 世 (Elizabeth I; 1533-1603, 在位 1558-1603) が崩御し，ジェイムス 1 世 (James I; 1566-1625, 在位 1603-25) が即位して 4 年経った頃である。

その題名からも察せられる様に，トマス=キッド (Thomas Kyd, 1558-94) 作の『スペインの悲劇』(*The Spanish Tragedy*, c. 1589) 以来 17 世紀にわたってイギリス劇壇で流行した「復讐悲劇」⁽²⁾ に属する作品である。しかし，同時期に書かれた他の「復讐悲劇」と較べてみると『復讐者の悲劇』の場合，復讐者に対する扱いが通常と異なっていることに我々は気付く。すなわち，本来ならば道徳的秩序の回復者として観客の共感を得やすい立場にある主人公=復讐者がここでは犯罪者として死刑に処せられてしまうのである。このことは方法はともかくも正義を希求した主人公の行動を否定し，観客からカタルシスの可能性を奪い，ただ救いようのない絶望感と虚脱感を与える。この結末が他に類をみないこの劇の特異性を決定づけている。本稿は他の「復讐悲劇」と違い『復讐者の悲劇』では劇作

家が復讐をどのようなものとして描いたのか、その結果どのような劇世界が出来上がったかを考察することを目的とする。

ここで16, 7世紀のイギリスで「復讐」はどのようなものと考えられていたかについて触れる。この時代は復讐に関して、それを容認する考えと否定する考えが共存するといういわゆる二重の基準 (double standard) が存在していた。否定する勢力を支えるのは “avenge not yourselves, ... Vengeance is mine;” という新約聖書の「ロマ書」12章19節あるいは「眼には眼を; 歯には歯を」といった同害復讐を禁じる「マタイ伝」5章38-44節を背景とするキリスト教倫理観であり、容認する勢力を支えるのは同代人ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) の言葉に代弁される「一種の野生の正義である」(a kind of wild justice)⁽³⁾ という考えである。中世以来のキリスト教倫理観に基づく復讐観が当時に於いては旧来の価値観として侮り難い影響力を有していた一方で、それに対抗する形で「野生の正義」とする復讐観が新来の価値観として台頭してきた。エリザベス・ジェイムス朝期の人々はキリスト教倫理観をはじめとする旧来の価値観に対して非常に懐疑的になり、新来の価値観の感化を受け始めたと同時に、それでもやはり、旧来のそれにこだわらずにはいられないという複雑な心情を持っていた。また殊に注意しなければならないことは「野生の正義」という表現が「神を恐れぬ野蛮な行為による正義」というよりは「神に頼らず自分自身の力で実現される正義」という寧ろ積極的な意味で解釈されていた向きがあったと思われる点である。そして自分自身の力を頼みとして事を実現しようという意志はまさに近代的な価値観を背景にして生まれたものなのである⁽⁴⁾。The *Revenger's Tragedy* には先に述べた復讐をめぐる当時の相反する認識の対立が2人の人物—それも若年と老年の対比に託して描きこまれている。復讐を容認する勢力は主人公で若年の

ヴィンディーチェ (Vindice) に否定する勢力は老年のアントーニオ (Antonio) に具現されている。年齢をはじめあらゆる点でこの2人は大変に興味深いパラレルをなしている。そして2者の対比の構図はこの劇の根幹をなしている。

2人は同じ不幸にみまわれている。自分の許嫁または妻を、淫猥で横暴な公爵一族に辱められ死に至らしめられている。両者はそれぞれにその死を嘆き、公爵一族の横暴墮落に対し泣き寝入りはすまいと固く心に決めている。しかしながら、この先2人のとった行動は実に対照的であった。

まずヴィンディーチェ。彼は許嫁グロリアーナ (Gloriana) を老いぼれた公爵に毒殺された。彼女の「清らかな性質が公爵の中風病みの情欲を満たすことに同意しなかった」(11.33-4) ただそれだけのためにである。許嫁の髑髏を片手にヴィンディーチェは屈辱と無念をかみしめ、復讐を誓う。

Vengeance, thou Murder's quit-rent, and whereby
Thou show'st thyself tenant to Tragedy,
Oh keep thy day, hour, minute, I beseech,
For those thou hast determined. Hum, who'er knew
Murder unpaid? Faith, give Revenge her due,
She's kept touch hitherto—... (I.i, 11.39-44)

上の台詞から窺えるのは激しい憎悪と恨み、そして復讐心である。ハムレット (Hamlet) が示した様な躊躇など微塵もない、決然たる意志表明である。些かの躊躇いもなくヴィンディーチェは復讐に邁進する。やがて彼は変装し公爵の嫡男に取り入って宮廷に潜り込み虎視坦々と機会を窺い、事

の成就に至る。

他方、アントーニオ。公爵夫人の連れ子に凌辱された彼の妻は生き恥を晒すことを拒み自害した。アントーニオは数名の貴族を屋敷へ招いて妻の遺骸を見せ、悲痛な胸の内を吐露する。

Draw nearer lords and be sad witnesses
Of a fair comely building newly fallen,
Being falsely undermined. Violent rape
Has played a glorious act : behold my lords
A sight that strikes man out of me. (I.iv, 11.1-5)

更に彼は、この凌辱事件の裁判の判決が、公爵のいい加減さと公爵夫人の手前勝手な助命嘆願のために延期されてしまった理不尽を訴える。その場に立ち会う貴族らも悲しみと憤りを分け持とうとする。

My lord since you invite us to your sorrows
Let's truly taste'em, that with equal comfort
As to ourselves we may relieve your wrongs:
We have grief too that yet walks without tongue:
(I.iv, 11.20-3)

そして最後に一同の間で次のような誓いがなされるのである。

HIPPOLITO

.....

I bind you all in steel to bind you surely,
Here let your oath meet, to be kept and paid
Which else will stick like rust and shame the blade.
Strengthen my vow, that if at the next sitting
Judgement speak all in gold and spare the blood
Of such a serpent, e'en before their seats
To let his soul out, which long since was found
Guilty in heaven.

ALL We swear it and will act it.

.....

HIPPOLITO

'Twere pity
The ruins of so fair a monument
Should not be dipped in the defector's blood.

PIERO

Her funeral shall be wealthy, for her name
Merits a tomb of pearl. My lord Antonio
For this time wipe your lady from your eyes;
No doubt our grief and yours may one day court it
When we are more familiar with Revenge. (I.iv, 11.58-74)

ヴィンディーチェとアントーニオを比較すると2人共、許嫁や妻を不当に奪われた無念を晴らしたいと考えた点では共通するのだが、そうすべく行動をおこすやり方については両者の間に大きな違いがあることに気付く。すなわち、ヴィンディーチェは他人をあてにせず最後まで自分自身の

力——手助けをするものはいても実の弟——で復讐をとげることを考え実際にそうしたのに対して、アントーニオは事情を公表し、他者の同情と協力を得た上で仇を討とうと考えたのである。若いヴィンディーチェの気持ちがい内へ内へと籠もってしまったのに対して、老いたアントーニオの気持ちは外へ開かれたのである。

アントーニオが貴族を招いて妻の遺体や身に受けた不当な仕打ちを公開するということには、前例があることに気付く。シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の長篇詩『ルクリースの凌辱』(*The Rape of Lucrece*, 1593-4) でも知られる紀元前 509 年にローマで起こった事件である。当時のローマ国王子に強姦され自刃したルクリースの夫と父は、彼女の告白と死に立ち会った他の貴族らと共に国王一家の横暴に蜂起を決意、復讐することを誓った。更に遺骸を屋敷から運び出してローマの街をねり歩き民衆にも公開、彼らの同情と支持も得た。国王一家は追放され復讐は成就した。ローマはこれを機に王制から共和制に移行した。

現代人にとっては遺骸を担いで街をねり歩くことは奇異な行為に思われるのだが、これには意義がある。テリー=イーグルトン (Terry Eagleton, 1943-) の評論『クラリッサの凌辱』(*The Rape of Clarissa*) 邦訳版の「解題」で指摘されているが、遺骸が私邸の内から外へ運び出されることはルクリースの死が私的な事件を脱して公的な意味を持つことになる。王子に暴行を受けた体が、暴政に痛めつけられたローマの政治体 (ポディ・ポリティクス) の象徴となるのである。ルクリースの死の公開は私的な復讐を、民衆の支持を背景にした国家体制の転換を促す政治的な起爆剤に正当化する手段として機能したのである⁽⁵⁾。

アントーニオの場合も、同様の狙いがみとめられる。妻の死の公開、それをうけて「奥方様のご葬儀は盛大に執り行いましょう」(I. iv, 70) と

いう提案はこれを公的に問題視されるべき事件として広く民衆の目に触れさせることを意図したものである。私的な痛みや恨みを他者にも感じられる痛みや憤りに発展させ私的な復讐を公的な制裁にすり替えようという戦略が隠されていると考えられる。アントーニオの復讐は先例に倣って企てられた。しかも、「復讐」という言葉を彼本人は口にしていない。他人に言わせている。他人にそれを言わせるよう仕向けているようにも見える。

ヴィンディーチェが行動する復讐者であるのに対しアントーニオは行動しない復讐者である。年齢も感じられるが、ヴィンディーチェが東奔西走して復讐を遂げたのに対し、アントーニオは妻の死を公開する以外はただの1度も積極的に行動することはなく、そして手も汚さなかった。仇である公爵夫人の連れ子が死んだのも彼にとっては偶然のなせる業であり、彼の意志や行動が直接関わったことではなかった。そして最終的に最も得をするのがアントーニオなのである。妻の恨みが晴れた上に、根絶やしになった公爵一族に代わって支配者になる。その上ヴィンディーチェには老公爵と嫡男を殺したかどで弟共々死刑を宣告する。

『復讐者の悲劇』は行動する復讐者と行動しない復讐者を描き、行動する復讐者の悲劇を結末に用意した。これは本稿冒頭でも述べた様に、同時代に書かれた他の復讐悲劇と較べると特異なことである。大概、復讐悲劇に於ける復讐者は罰せられることはない。勿論人を殺す行為を正面から肯定するのは難しいためから復讐者が復讐を遂げた後の劇世界に残ることはなく、自らは落命して姿を消すことが多い。が、乱れた道徳的秩序の回復者としての観客や劇中の他の登場人物の共感は強く、最後は落命したことへの同情と哀悼を勝ち得ることで復讐者は面目を保つことができる。そして多くの場合、血に汚れた手で得た正義を受け継ぐ若く新しい命の存在が用意されている。それ故に、カタルスツも達成される。『復讐者の悲劇』

の場合、行動した復讐者ヴィンディーチェは行動しなかった復讐者アントーニオに罰せられ、劇は通常の復讐悲劇のもつカタルシスの可能性を奪われてしまうことになった。劇作家はこういう結末を用意することでどのような劇世界を創造しようとしたのであろうか。

ヴィンディーチェとアントーニオに具現される復讐観は新来の価値観と旧来のそれを反映しているのだが、両者の価値観を新来あるいは旧来のものとしている決定的要素は神に対する態度ではないかと思われる。ヴィンディーチェの復讐への積極的姿勢はベーコンの「野生の正義」という表現ばかりが背景になっているとは思えない。彼の姿勢の根源にあったものは神への根強い不信感なのではないだろうか。ヴィンディーチェは言っている。

Why does not heaven turn black or with a frown
Undo the world? (II.i, 11. 250-1)

復讐について旧来の考え、復讐の権限は神にのみあるのだというものは「神が必ず正義を示す」という強い信頼があってこそ意味を持つ。然るに、神への信頼を失った者にとってキリスト教倫理に基づく復讐観は意味を持たない。彼にとってもはや神は無力だった。何者にも頼らず自分の力で事を成就しよう、自分自身だけを頼みとしようという意味、これは全て神をして他者への強い不信感に端を発しているのである。他方アントーニオの場合、神への信頼は固かった。神の正義を信じ他者の良心を頼みとしつつ時を待った。そして自分は直接手を下すことなく復讐を遂げ、「天上の法は公正である」(V. iii, 1. 93) と讃える。彼は復讐は神のものであるという旧来の価値観に従い、観客の目には通常の復讐者と映らない行動しない

復讐者に徹した。そして良い結果を得た。この劇は行動をとらず、神への信仰を失わなかった者、旧来の価値観に従った者が勝利したのである。

ジュムス朝演劇の1つの典型とみなされることの多い『復讐者の悲劇』だが、それはこの劇世界にある価値観が従来にない新しいものであるという意味でのことではない。この劇の底流にある価値観はむしろ旧来のそれに寄っているように思われる。ヴィンディーチェがアントーニオによって罰せられるからである。罰せられるということはヴィンディーチェが実際に行動して遂げた復讐によって通常ならば実現したと考えられる正義が評価されないということである。そして若いヴィンディーチェが具現した新しい価値観は乱れた道徳的秩序の回復の為という大義名分を背景に、おそらくは多くの観客の共感を得る可能性があったにもかかわらず、アントーニオの具現した老獪さと保守的な価値観に敗れたわけである。このことを考えると『復讐者の悲劇』の作者は同世代の他の作家例えばウェブスター（John Webster, c. 1578-c. 1632）と較べても新しい価値観に対してかなり懐疑的な立場にあったのではないかと思われる。神への信頼を忘れ、神の権限を侵犯して行動する人間がどういう末路を迎えることになるかを示し、無神論を諷める道徳的・教訓的な要素をこの劇から読み取ることが極めて可能なのである。倫理や公的手段を無視し主観的な感情を拠り所とし、自身の行動力のみを頼みにする同害報復を単純に肯定すると、殺し合いに歯止めがきかなくなり、人間社会は道徳的に荒廃する、そうなる则本復讐の原動力であった筈の正義の観念は消えてしまうことになる。他の復讐悲劇と違い、『復讐者の悲劇』はこの復讐の負の要素を特に強調していると考えられるのである。

この劇の書かれた時代、新しい価値観が台頭してきたことは確かである。しかし時代はそれを諸手を挙げて歓迎したわけではなかったのであ

る。「復讐は野生の正義」と記した同世代人ベーコンも、実は、キリスト教倫理を退けて新しい価値観を打ち立てるつもりはなかったのである。

REVENGE is a kind of wild justice, when the more man's nature runs to, the more ought laws to weed it out: for as for the first wrong, it doth but offend the law, but the revenge of that wrong putteth the law out of office. ... *Public revenges are for the most part fortunate*; as that for the death of Caesar; for the death of Pertinax; for the death of Henry the Third of France; and many more. *But in private revenges it is not so*; nay, rather vindicative persons live the life of witches, who as they are mischievous, so end they infortunate. (emphasis added)⁽⁶⁾

「野生の正義」と言いながらも彼の姿勢は非常に慎重であり寧ろ保守的である。そしてこの論は復讐者の悲劇に於いてはヴィンディーチェの復讐観よりアントーニオのそれに近いと言えよう。

しかしながら、『復讐者の悲劇』の作者は当時のイギリス劇壇にあってひとり、モラリストを自任していたわけでもないように思われるのである。この劇世界、最後に残るのは生い先短い年寄りである。次代や道徳的秩序の回復された世界を担ってくれたであろう筈の若い命は老獪な老年によって葬り去られてしまったのである。不毛である。作者が観客に最後に残した世界は、虚無、救いようのない絶望、そして不毛なそれである。そしてこのことは、時代の波にうまく調子を合わせ、一見道徳的でもっともらしくもありながら狡猾にしぶとく生き続ける老年、若者達や新しい時代

の芽を踏みつけながら凶たく生き残る老年を見る観客の視線を痛烈に皮肉に、冷笑的にしている。

この劇が最後に残した世界とそれに対する観客の視線、これが『復讐者の悲劇』をジェイムス朝演劇の1つの典型たらしめる独特の暗さをつくりだしているのである。

〔使用テキスト〕

Gibbons, Brian., ed. *The Revenger's Tragedy*. London : A & C Black, 1967.

註

- (1) 1607年の出版登録簿に作者が記載されていなかった。1656年にシールターナー (Cyril Tourneur, ? 1575-1626) の作とされたが異論が出、「作者の問題」は『復讐者の悲劇』を論じる上で長年の関心事となった。ミドルトン (Thomas Middleton, 1580-1627), マーストン (John Marston, ?1575-1634), ウェプスターが真の作者の候補として挙がっており、その中でもミドルトンが最有力候補と目されている。
- (2) 当時の他の復讐悲劇の例として挙げられるのはマロウ (Christopher Marlowe, 1564-93) の『マルタ島のユダヤ人』 (*The Jew of Malta*, c. 1590), シェイクスピアの『タイタス=アンドロニカス』 (*Titus Andronicus*, 1593-4), 『ハムレット』 (*Hamlet*, 1600-1), マーストンの『アントニオの復讐』 (*Antonio's Revenge*, 1600), ターナーの『無神論者の悲劇』 (*The Atheist's Tragedy*, 1609), ウェプスターの『白魔』 (*The White Devil*, c. 1612), ミドルトンの『チェインジリング』 (*The Changeling*, 1612) 等である。
- (3) Bacon, Francis. *Essays*. Intro. and notes by Shigehisa Narita. (Tokyo : Kenkyusha, 1948), p. 13.
- (4) 己の力を信じて力強く行動する若者としてシェイクスピアの『終わりよければすべてよし』 (*All's Well That Ends Well*, 1603-4) のヒロイン・ヘレナ (Helena) を例に挙げる事ができる。以下に引用する彼女の台詞は大変印象的である。

Our remedies oft in ourselves do lie
Which we ascribe to heaven; the fated sky

Gives us free scope ; only doth backward pull

Our slow designs when we ourselves are dull. (I.i, 11.212-5)

- (5) Eagleton, Terry. *The Rape of Clarissa Trans. Yoichi Ohashi.*
(Tokyo : Iwanami Shoten, 1982), p. ix-xi.
- (6) Bacon, *Essays*, p. 13-5.

View of Revenge in *The Revenger's Tragedy*

Yuuko Mase

Summary

The Revenger's Tragedy, published anonymously in 1607, and from 1656 ascribed to Cyril Tourneur, belongs to the genre of revenge tragedy. It is a dramatic genre that flourished in the late Elizabethan and Jacobean period and its theme is, needless to say, 'revenge'.

There are two revengers in this play. Young Vindice, a hero, thinks that it is right to materialize his desire for revenge for himself. His attitude is supported by the new sense of values. On the other hand, old Antonio has the opinion that human being does not have a right to revenge himself. He follows the old sense of values based on conventional Christian ethics. Their contrary attitudes reflect contemporary social condition that there is a double standard of revenge. In case of this play, unlike other revenge tragedies, Vindice the revenger who is usually in the situation of gaining the sympathy of a large audience is executed by Antonio who embodies the cunningness and conservativeness. It is the negative reaction toward the hero's search for justice. As a result, the audience is taken away catharsis. We can guess that the author of *The Revenger's Tragedy* was skeptical about the new sense of values embodied by Vindice.

However, in the world of this play, it is the sterile old men who are left alive. It makes the audiences' eyes severely critical and sneerful. The world of this play which presented at the last scene and the eyes of the audiences make this play gloomy. The gloominess is one of the typical elements of Jacobean drama.

(学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程, イギリス文学専攻)